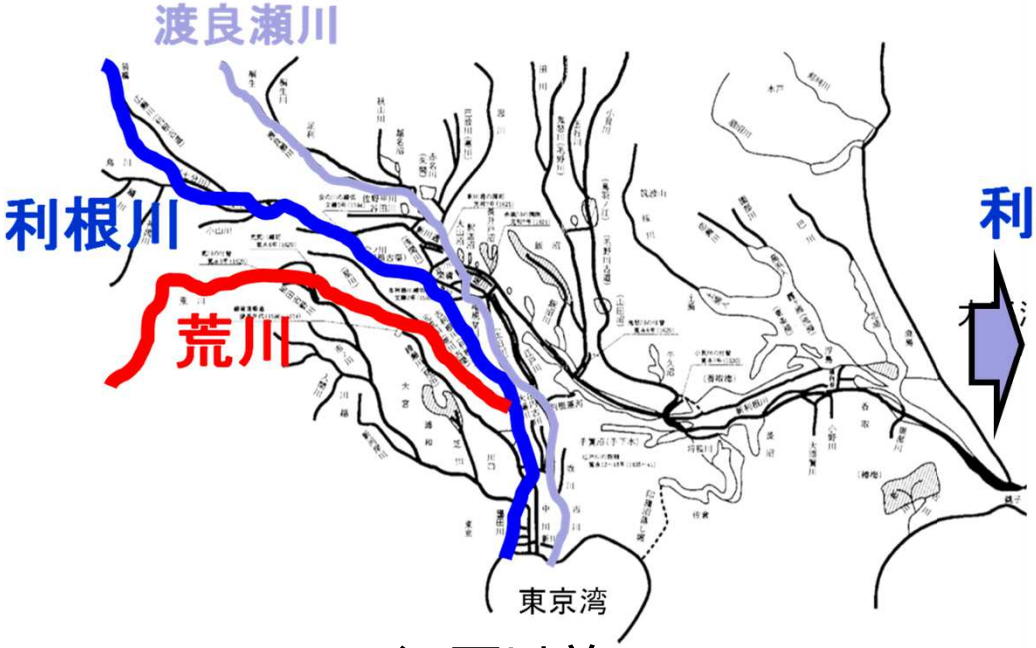
荒川の歴史

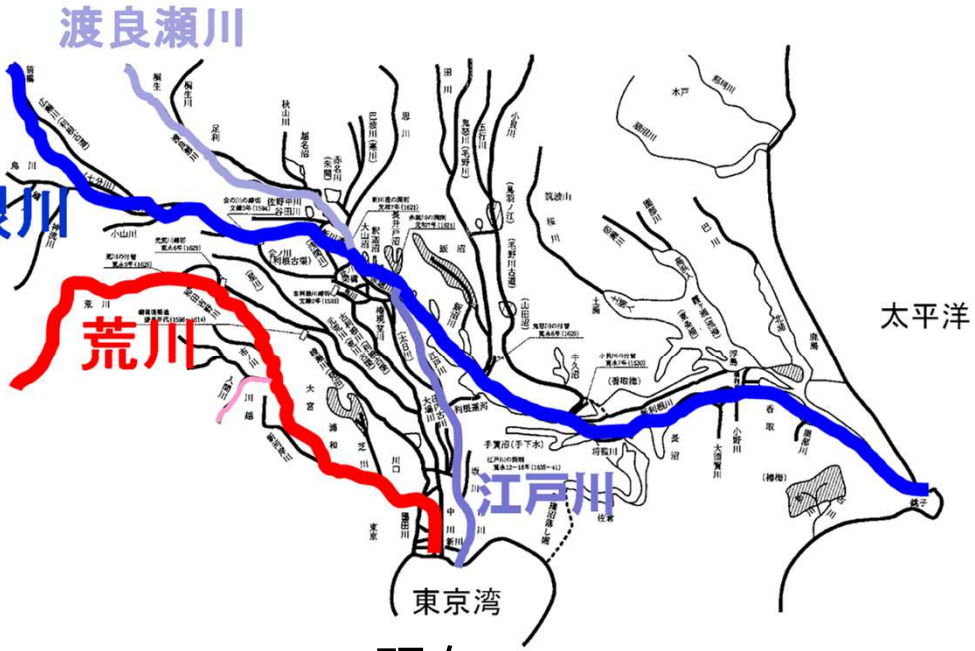
「利根川の東遷」と「荒川の西遷」

徳川家康は江戸入府直後から、雨が降れば一面水浸しになる大湿地帯という、人を寄せ付けないほどの劣悪な環境であった江戸の整備に乗り出し、利根川と荒川を分離。

〇利根川の東遷(1594年～1654年)
　東京湾に流れていた利根川の流れを江戸から遠ざけ、銚子で太平洋に流下
〇荒川の西遷(1629年)
　利根川と合流して流れていた荒川の流路を付け替え隅田川を経て東京湾に流下



江戸以前



現在

利根川	：	東京湾に流下	➡	関宿で江戸川を分流し、銚子で太平洋に流下
荒　川	：	当時の利根川と合流して東京湾に流下	➡	熊谷市で流路を付け替え、隅田川を経て東京湾に流下

明治43年大洪水

○江戸・明治時代には頻繁に洪水被害が発生し、既存の日本堤・隅田堤による治水では江戸を洪水から守ることができなかった。
○特に明治43年の洪水では甚大な被害が発生した。8月初めからの長雨が続き、さらに8月8日～10日にかけて秩父の山岳地帯に300～400mmの豪雨が降った。

破堤箇所：数十箇所

死者：369名（利根川筋を含む）

被災者：150万人

流失・全壊家屋：1679戸

浸水家屋：およそ27万戸

被害総額は、当時の国民総所得の約4.2%

本所南割（現在の錦糸町付近）

明治43年大洪水の被災状況

洪水で浸水した浅草公園（PHTO：下川林之輔氏）

民家を呑み込む濁水（墨田村）

本所南割（現在の錦糸町）付近の惨状。浸水深5尺（約1．5m）余り

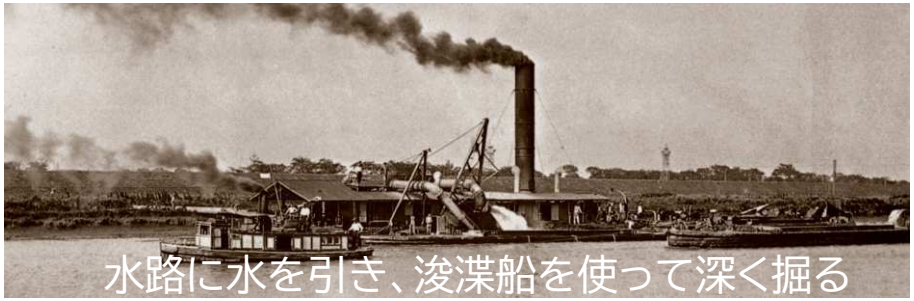
荒川放水路の建設

○明治43年大洪水を契機として、発展した江戸市街地の抜本的な治水対策として、新たに放水路の建設が行われた。

荒川放水路の建設状況

人の力や馬の力により
河岸部を整備

蒸気掘削機による
水路の掘削


水路に水を引き、浚渫船を使って深く掘る

荒川放水路建設（明治44年～昭和5年）

荒川下流河川事務所
Arakawa-Karyu River Office

○明治43年の大洪水を契機に、東京の下町を水害から守る抜本策として着手

○北区の岩淵に水門を造り本流を仕切り、岩淵の下流から中川の河口方面に向け、延長22km、幅500mの放水路を開削。

旧岩淵水門完成後の状況

荒川放水路改修平面図

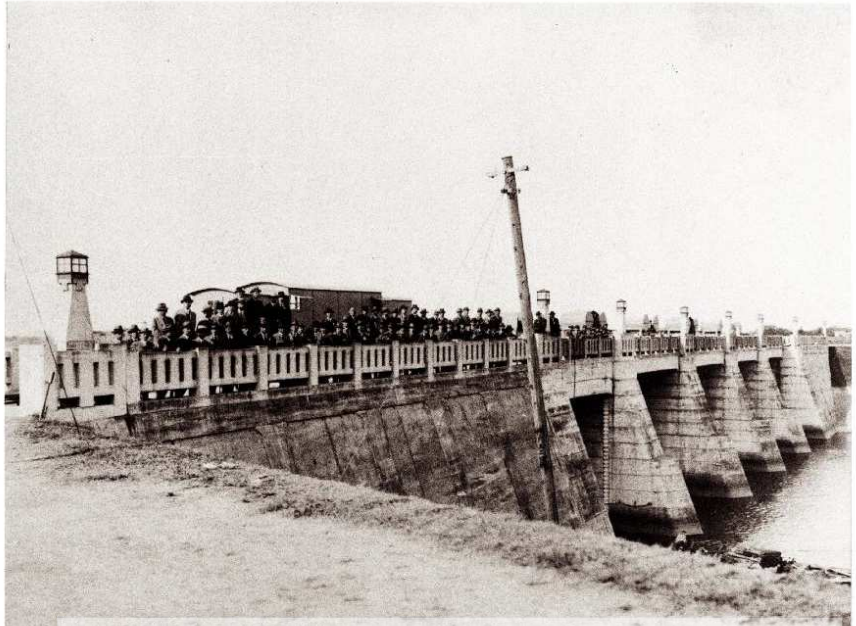
名称	数量	備考
総工事費	31,446,000円	現在価値換算で 約2,300億円 （用地補償費用を除く）
工事期間	20年間	明治44年～昭和5年
掘削土量	12,700,000㎥	
土地買収面積	1,098町歩 （1,088ha）	日比谷公園の約67倍
移転戸数	1,300戸	
延べ労働人員	約310万人	
死傷者数	998人（死者22人）	

※左図の施設名称は開削に伴い新たに新設した箇所

荒川放水路建設当時の状況

荒川放水路通水式（大正13年10月12日）

岩淵水門


岩淵水門で挙行された荒川放水路通水式

荒川放水路（奥）と新河岸川（手前）